

近況報告

昨年度の広島城北高校サッカー部は、新人戦ベスト8、高校総体ベスト16に続き、高、篠原、松本、3人の3年生が中心となって戦った高校選手権大会においても、数年来の目標だった二次リーグに進出し、ベスト16という結果を残すことができました。以上各大会の総合成績（年間順位9位）により、大きくシステムが変わった今年の新人戦【県新人リーグ】では上位リーグに入り、今年はいきなり県内の強豪チームとのリーグ戦勝負からスタートしました。

広島県新人リーグ

＜第一節＞ 対 広島朝鮮高校 平成16年1月11日(日) 1-1 (1-0 0-1)

前半途中まではプレスがかかり優勢に試合を進めたが、相手の闘志に押されて次第に球際の争いに勝てなくなり、同点に追いつかれてそのままタイムアップを迎えた。

＜第二節＞ 対 海田高校 平成16年1月18日(日) 0-1 (0-0 0-1)

＜第三節＞ 対 銀河学院 平成16年1月25日(日) 0-1 (0-0 0-1)

いずれも健闘しながら海田戦では終了間際、銀河学院戦では後半半ばに失点した。

＜第四節＞ 対 山陽高校 平成16年2月1日(日) 1-2 (0-0 1-2)

昨年度年間2位の強豪校に対し、ボール保持率は互角だったもののゴール前での精度に欠け、相手の攻撃をしのぎきれず力尽きた。

＜順位決定戦＞ 対 廿日市高校 平成16年2月14日(土) 2-1 (0-1 2-0)

前試合までと違い、前半はプレスがかからず苦しい展開だったが、後半風上に立ってからは優位にゲームを進め、松本の2得点で逆転勝ちした。

春期県リーグ出場決定リーグ

対 吉田高校 平成16年2月28日(土) 2-2 (1-1 1-1 PK7-6)

立ち上がりから動きがやや緩慢で球際の寄せが遅く、ゲームを通じてセカンドボールを拾えなかったことが苦戦の原因。あらためて現チームにおけるプレスの重要性が浮き彫りとなった。

対 国泰寺高校 平成16年2月29日(日) 0-1 (0-1 0-0)

スキル面では相手チームよりやや劣ったが、ディフェンス部分は機能し、互角以上の戦いはできた。しかし後半幾度かの決定期を逃し、前半の失点を取り返すことができなかった。

対 大門高校 平成16年3月21日(日) 1-0 (0-0 1-0)

得点こそ1点だったものの、選手もしっかりファイトし安定した戦いぶりだった。しかし前試合の敗戦により、県総体は地区予選からの出発となった。

県総体広島地区予選

対 加計高校 平成16年4月11日(日) 14-0 (9-0 5-0)

開始1分の宮本のゴールを皮切りに計8人が得点し、大勝した。

対 広大附属高校 平成16年4月17日(土) 3-0 (0-0 3-0)

前半は今ひとつピリッとしにくい内容だったが、後半立ち上がり、1年生の国広のゴールでリラックスできたのか、その後はグッドゲームを展開した。

対 五日市高校 平成16年4月18日(日) 0-1 (0-0 0-1)

完全にゲームを支配したものの、幾度もあったチャンスを逃したことが終了間際の失点を招き、痛い黒星を喫した。

対 広島朝鮮高校 平成16年4月29日(祝) 0-1 (0-0 0-1)

県大会出場のためには絶対に負けない試合であり、選手の気合も十分だったが、開始4分に相手のミドルシュートで失点した。その後は押し気味に試合を進めたが、得点をあげることができず、今シーズンの戦いぶりを象徴する一戦となってしまった。

新人リーグ戦の導入等により、今シーズンは昨年よりも公式戦が増えています。結果的には各リーグ戦で思うような成績を残すことができず、3年続けた高校総体の県大会出場も果たせませんでした。

広島城北の生命線である前線からのプレスディフェンスは、フィジカル面の強化と相まって着実に進化しており、「県レベル」に達してきました。しかしその反面、最近の敗戦はほとんどが1点差で、接戦をことごとく落としています。これまで以上のプレスをかけつつ、ゴール前におけるフィニッシュの精度アップと、そこに至る過程の整備が不可欠であることは間違いないでしょう。

今後もスタッフミーティングを定期的に行い、課題の確認と改善は多角的に高いレベルで進めていくつもりです。また、ゲーム中の数々の局面を切り取って日々の練習にフィードバックし、よりゲームに近いハイプレッシャーな状況を再現してトレーニングしていきたいと思っています。

今後も「SAIJODAN」で切磋琢磨していきます。応援よろしくお祈りします。



広島城北高等学校サッカー部OB会

広島市東区戸坂城山町1-3 広島城北学園内 〒732-0015
電話 082-229-0111 FAX 082-220-2366



「サッカーと私」

高陽整形外科スポーツクリニック
院長 今田 岳男 (16回生)

始めまして16回生の今田岳男です。今回、宮本先生から会誌に投稿するよう連絡があり、取り急ぎ脈絡もなく書き始めております。

私がサッカーというスポーツを始めたのは小学校5年生の時でした。私の通っていた長束小学校は当時バレーボールが盛んで多くの児童がバレー部に入っていました。私はバレーのセンスがなく、サッカー部に入りました。弱小チームでなかなか勝利を味わうことはなかったですが、みんな楽しく和気藹々にボールを追っていました。そのころは「サッカーの神様」ペレが現役を引退したころで彼が日本にてサッカー教室が開催されることとなり、運良く参加することができました。今でも「サッカーの神様」ペレのバナナシュート

を鮮明に覚えております。

城北中学に入り、迷うことなくサッカー部に入部しました。すぐに高価なサッカーシューズを購入しま

したが、1年生の間は試合以外の練習で運動靴しか許されていなく、部屋に飾って眺めていました。夏の暑い日は、日陰のない最上段で、せみの声と耳鳴りの絶妙なハーモニイを聞きながらそれに負けまいと声を出していました。唯一の楽しみは、先輩に「小便行きま〜す。」と言って斜面の湧き水をこっそり飲むことでした。両手で水をすくうと微生物が一緒に泳いでおりましたが、全く気にせず「六甲の水」のようにおいしく飲みほしました。

プレーでの思い出は修道中学の選手に骨折をさせてしまったことです。私は小野伸二や中村俊介のようなテクニクはなく、根性タイプのプレーヤーでしたので容赦なく、膝のボールに突進して相手プレーヤーの足を削ってしまいました。言うまでもなく翌日の試合でギプスに松葉杖姿の相手を最上段で見かけました。その後も持ち前の根性だけで大学でもサッカーを続け現在でもたまに玉を蹴っています。

その後医師となり、広大整形外科に入局しサッカーをしていた縁で、Jリーグが始まった年にサンフレ



びで一杯になり試合前に感極まってしまうました。"やつと城北に帰ってこれた"。"やつとチームの一員に戻れた"のだと。試合の方は「1-0」で勝つことができ、勝利を決めたゴールも今でも鮮明に覚えています。この選手権、僕の最後の大会は得失点差で惜しくもベスト16という結果に終わりました。しかしこの大会を通じて城北サッカー部、また自分自身も大きな経験、そしてそれ

上に何か大きなものを得たと思いません。城北サッカー部久しぶりの選手権二次リーグ出場、芝生での試合、今までにない設備に皆、一流選手にでもなったかのような控え室、そして大舞台での本気の皆実と試合ができたこと。これら全てが今後の城北の財産になったのではと思います。こうして僕の中学校から始まる、6年間の城北サッカー生活は終わりました。本当はまだまだ書きたいことがあるのですがまとまりがないのでこの辺りで止めておきます。

今、僕はいわゆる浪人をさせてもらっています。これは病氣・サッカーを続けたことは全く関係なく自信の努力不足なのですが。今僕はまだ多少手足が不自由です。多分歩き方もおかしいと思います。僕は自分もこんな体にした病氣を心の底から恨んでいます。けど後悔は全くしていません。病氣になったおかげでサッカーを続けることができ、色々なものを得ることができました、それは周りの支えであったり、友情、愛情であったり、だから今でも他人から"病氣になってよかったね"などといわれて心の底から腹が立つ反面確

かにいい経験だと誇ることができま

す。ベッドの上での長い期間、今の浪人生活、この長い時間様々なことを考えることができました。生き方であったり、人間関係であったり。そんな時間を与えてくれた病氣には感謝しています。おかげで僕は今、将来に向けて明確な目標をもつことができました。

最後に偉そうになりますが、やはり生きていく上で、何かを成し遂げる上で一番大切なのは強い"意志"だと思えます。この会報誌は幅広い年齢層のOBの方が読まれていると思います、各々様々な苦しみや悩みを抱えていると思います。僕は宮本先生の言葉で一番印象に残っているのは、試合中によく使われる"システムや戦術に逃げるな"という言葉です。普通の人間の僕らは、"自分の能力ではそんなことはできない"、"やりたいことがあるけどセンスがない実力がない"、"言いたいことあるけど関係を崩したくない"、"色々な理由をつけて本質から逃げてしまおうという経験を皆したことがある"、"夢を実現した人たち、

今各業界でトップに立っている人たちは何度挫折しても強い意志を折らなかつた、曲げなかつた人間なんだと僕は思います。だから自分にとつて一番大切なモノ、守るべきモノを守るために強い意志をもつことが生きる上で最も大切なことだという考えに到達しました。

そしてもう一つ伝えたいのは、"明日は必ずくるとは限らない"ということ。僕はこれまで大きな病氣にかかったことがなく健康な体だけが取り柄でした。けどそんな人間にも突然死に直面してしまうのです。またそれは大事な近い人間かもしれない。だから僕は今この時間を大切に生きようと思えます。

色々と言書かせてもらいましたが、一番の感謝は両親にしたいと思います。何度泣かせてしまい、不安にさせたのかは数え切れませんが、今後本当に迷惑をかけた両親を安心させ誇らしくおもわれるよう精一杯生きていきたいと思えます。そして本当の最後に、城北サッカー部を中心の方々に厚く御礼を申し上げたいと思えます。

サッカーと共に

38回生 緒方 太一

広島城北高校サッカー部2003年卒業生の緒方太一です。今回はこの手記で私がサッカー部と関わってこれたことの喜びを皆さんにお伝えしたいと思います。というのも私は高校時代は非常に練習「不」熱心な部員であり、いつも公式戦はフィールド外から眺めていました。しかし、そんな私にさえサッカーはたくさんの思いや感動を与えてくれたのです。今までこの手記に登場された諸先輩方は歴代の模範的部員でチームの中心として活躍された方ばかりなので大変恥ずかしいのですが、時にはこのような部員の話にも耳を傾けて頂きますでしょうか。私がサッカーを始めたまきっかけは、Jリーグブームに便乗した大変軽い気持ちからでした。この浮ついた気持ちで始めたせいか小学校時代から特に真面目に練習することなく城北中学に進学した際は坊主が嫌というだけでサッカー部への入部を断念したほ

どです。その後入部し、2人の大下先生にご指導頂くも結局不真面目なプレーを続け、レギュラーになることなく中学生生活を終えてしまいました。高校サッカー部へ入部したのは、ある唐突にサッカーがしたいという思いにかられて最上段グラウンドに行つたからです。発作的な衝動から私の高校サッカー生活は始まつたのです。当初DFの私がGKをやってみないかという誘いに2つ返事で承諾したのも入部してすぐのことです。そしてこの1年後に高校サッカーでもっとも思い出深い出来事が起きました。その出来事とは、新人戦直前に正GKの鈴木先輩が怪我をしたため、急遽1年の私が大会でGKを努めたことです。最初はこの千載一隅のチャンスを活かそうとやる気に満ちていました。しかし私の技術は全く通じず、大会直前にチームの守備を崩壊に追い込んでしまつたのです。毎試合怒鳴られる中で私は「実力で勝ち取り望んでレギュラーになつたわけではないのになぜ自分がここまで責められなければならないのか」と自己中心的な被害者意識に苦しんでいました。一

時はこの状況から逃げるために真剣に退部も考えたほどです。そんな中あつという間やってきた本番は、2戦2敗という結果に終わつてしまいました。正直に書くと言つては負け試合の後でもへらへらしているのが私です。この日も試合終了直後は言い訳を必死に考えていました。しかし試合後一人でトイレに入った瞬間、突然涙が溢れて止まらなくなつたんです。後悔とか悔しさとかが頭の中ぐるぐる回りだしてただ泣くことしかできませんでした。人生で唯一のくやし涙を流した時です。ちなみに唯一のうれし涙を流したのは、うちの代が最後の最後で県大会出場を決めた試合でした。ベンチからの観戦でしたが、この時もどうにも涙が止まらなくなりました。もっと本気で取り組んでいたら私のサッカー人生も全く違つていたのかもしれない。しかし自分ではこの過程に十分満足しています。フィールドの外で味わう様々な思い、出会い、こんな経験はサッカー部にいなければとても味わえかつたからです。私はたとえ試合に出れなくてもサッカー部に携わる限り多くのものを得

ることができると考えています。今は大学サッカー部に所属し、主務をやっています。プレーであまり貢献できない私も涉外や協会関係の雑務を一生懸命することでみんなから「ありがとう」と言つてもらえるようになりました。サッカーへの携わり方は々あると思いますが、どんな形でもサッカーは必ず私たちを成長させてくれます。そんなサッカーと今まで歩んでこれたことは、私の誇りです。皆さんも是非これからの生活をサッカーと共に歩んでみてはいかがでしょう。

「感謝」

39回生 篠原 孝弘

今年の春城北学園を卒業した篠原と言います、今年宮本先生から電話を頂き会報誌の文章を頼まれ、引き受けさせてもらいました、今年文章を書こうと思った理由はたくさんあるのですが一番の理由は自分に関わつた人達への感謝の気持ちを伝えたくつたからです、忘れもしない昨年の2月25日僕は脳血管炎いわゆる脳梗塞という病気にかかりました、練

習中長距離走を走り終わった後に体の自由が突然きかなくなり、その後先生の車で近くの病院に運ばれそこから私は全く意識がなくなり目が覚めると僕は広島県病院で管や点滴をたくさんつけられて寝ていました。全く分けの分かつていない僕はベッドの横で神妙な顔つきでいる両親に何があったのか聞いてみてもよく理解できず、ベットから出ようとすると体の左半部が全く動かず、この時初めて自分に何があったのだとようやくわかりました、その時はその厳しい現実を受け入れることがどうしてもできなかつたのですが、入院して何日か後に先生方や同級生が見舞いに訪れ部員のメッセージ付きのボールを手渡された時に涙を流しながら仲間の顔を見ることでやっと自分分は病気になったんだという現実を受け止める覚悟ができたのを今でははつきり覚えていますが、後になって話を聞くとこうして生きてるのが奇跡というくらい種類の病気が多かったらしいのですが医療に携わっていただいた、特に主治医を担当していただいた松重先生は城北OBということで後輩にあたる僕を非常に熱心

に面倒を見て頂きました、命を助けていただいた先生を含め病院の皆様には本当に感謝の一言に尽きます。

そこからは長いリハビリの始まりでした。僕は当初自分の体に起きたことを甘く見ていました。春休みに楽しみにしていた九州遠征にも行くつもりでいたし、サッカーもすぐできるだろうと短期間に考えていました。集中特別治療室から一般病室に移ることができたのですが一人では車イスにすら乗ることができず悲惨な思いもしました。夜になり部屋が消灯されると、今となってはかっこ悪いのですが声を殺して毎日のように泣きながら、動かない体を相手に格闘していました。今となって考えてみるとあの時は、毎晩のように病室に顔を出して頂いた宮本先生、黒瀬先生、大下先生、岩井コーチ、菊一トレーナー他、他数の先生方そして両親に自分のためというよりは、自分はこんなことができるんだ、こんなに動けるんだということを見せ、安心させ、ただ、喜んで欲しかっただけだったような気がします。

入院中頻繁に訪れてくれた当時担任であった寺井先生、また6年間よ

く面倒を見て頂いた宮川先生、清水校長先生、そして一生懸命千羽鶴を折ってくれるなど親切にしてくれたクラスメイトには心から感謝をしています。でも、一番お礼を言いたいのは同学年のサッカー部の仲間です。来て欲しいと言えばすぐに駆けつけてくれて本当に励ましてくれた、僕は城北サッカー部に入りこんな最高の仲間ができたことが一番の財産です。中でも、主将を努め一番の親友の高には色々な悩みも相談しわがままを聞いてもらい本当に感謝しています。本当に最高のヤツです。また多くの先輩方、後輩にも励ましの言葉をもらい、中でも高山さんには手紙まで頂き本当にありがとうございます。そしてリハビリ病院を移り目標を最後の春の総体に定め本格的にリハビリが始まりました。リハビリを重ねるにつれ、手が、足が動く喜び、歩ける、走れる喜びそしてサッカーのできる喜び大げさになるけれど今生きている喜び、そんな感覚を体感しながら必死に体を動かしました。ある日リハビリの一貫で療法士の先生とボールを蹴ろうということになり楽しみにしてやってい

た時、左足で蹴ろうとした瞬間、(僕は右ききなのですが左足の方が得意で大事な足でした。)全く蹴れず、今まで溜まっていた何かが壊れた感じとして病室に駆け込み泣き崩れてしまい迷惑をかけた日もありました。そんな時いつも励ましてくれたのはみんなからもらったサッカーボールでした。この二つ目の病院で治療を担当していただいた先生方には患者者という枠を超えてよくしてもらい本当に感謝しています。

そしてやっと僕の誕生日の次の日5月8日に退院ができ、ようやく待ち望んでいた最上段に戻ってくる事ができました。けどここからが本当の意味でのリハビリのスタート出陣しい日々の始まりでした。その時チームは三年生の最後の大会に備え、僕の入院中も予選をこなし県大会の直前でした。結局チームはベスト16という結果で多くの三年生は引退し、僕自身の出場も叶わず終わってしまいました。僕は中学生の時の最後の大会もけがで出場ができず今回も長い間一緒にやってきた仲間と最後の大会に出ることができず、これだけが城北での心残りです。同級生に

は本当に申し訳なく思っています。またいつかあのメンバーでサッカーをするのが僕の夢の一つです。そして新チームになったわけですが、僕は選手権に残ることが何も悩むことなくスムーズに流れていきました。病気になる以前から選手権に出ると決めていたのですがやはり病気が一つのきっかけになったのは間違いありません。感謝、感謝としつこくなるようですが、一緒に残った三年生の主将の髙とGKの松本には本当に感謝しています。二人とも自分の意思だと思のですが、気持ちのどこかには、城北中高と6年間一緒に闘ってきた僕に付き合ってくれたという所があったのではと、勝手に解釈しています。

そして3ヶ月後に迫った選手権の県予選に向けてリハビリを開始しました。この時は菊一トレーナーや岩井コーチにかなりの時間を僕のトレーニングに付き合ってもらいました。夏までの期間僕はかなり自分言いわけてばかりの弱い人間だったと思います。病気だから仕方ないよねとか、そこまでできるようになったんか、すごいなと言われ

て落ち着いていたし、同情されたいという思いが強かった気がします。その考えが完全に無くなったのは夏休みに行った一つの練習試合です。やはり体が少しずつでも動くようになりサッカーをしていると試合がしたくなるのは皆様もよく分かると思います。僕は先生にわがままを言ってます。Bチームの試合ですが出させてもらいました。僕は小・中・髙とずっとサッカー一筋で試合にも常に出て、髙校では中盤の大事なポジションを任されていました。

そしていざ試合が始まると相手チームの選手にとばされ、ボールも触れず、挙げ句の果てにチームメイトから「大丈夫か、無理するなよ」とか同情され、明らかな試合の邪魔でした。

サッカーをしていてあれほど悔しかったことはあり



ませんでした。

その日から僕の甘い考えは変わり「僕はこんなにできる」だから僕を試合に使ってくれという思いと、完璧に治してチームの中心に戻りたい」という思いが重なり、よりリハビリに励むようになりました。中でも菊一トレーナーには「試合で使えるようにならないと監督にはOKは出さないし、試合には出せない」と何度も言われ宮本監督も「同情では試合に出さない」と言われ、この言葉が一番の薬でした。

夏が終わり県予選が始まり無事に突破することができましたがそこに僕の姿はありませんでした。試合の後にHPに、何で篠原を使わないのか、という書き込みがありました。本当にそれはそれで嬉しかったのですがそれは明らかに同情からきているものでした、やはりまだ自分は同情の対象として見られているのだと思いつつ、思いが重なりました。その後の練習前に宮本先生からその件についての話があり、先生の胸の内を聞き泣きそうなほどに、安心して喜び、まだこんなに信頼されているのだから一人の男として頑張らねばと

いう思いが強まりました。

そして10月も下旬になり選手権の2次グループリーグが始まりました。前日のミーティングでスタートから行くということを聞かされ本心に心踊る思いで試合を向かえました。3年間、いや6年間ずっと続けたこの大舞台での僕の復帰大一番は、悪くいうと同級生を引退に追い込んだ広島工大髙校でした。試合前、アップが終わり控え室に戻り、背番号10のユニフォームを手渡されました。聞けば、僕が倒れてから誰も着ることなく大切に守られてきたらしいのですが、袖を通した瞬間変わらぬ表情だったので内心喜



チェ広島ของทีมドクターになりました。当然チーム専属ではなく勤務医をしながらの仕事でしたので大変苦労しました。アウエーの試合に帯同する時は土日がつぶれ、海外遠征では病院の先生に叱られ、帰った時は肩身の狭い思いをしました。

アウエーの帯同の際は診療を終え遠征先に移動し選手の宿舎に直行します。試合前に故障のある選手をチェックして試合に臨みます。試合中にけが人がでたらダッシュでフィールドに入り即座にけがの状態を把握しその選手が試合続行可能かどうかベンチに知らせます（この時テレビに映ることがあります）。試合後は宿舎に戻り選手の治療を行います。翌日診療がある時などはそれから夜行列車に揺られて広島にもどりすぐにクリニックでの診療を行うこともあります。結構ハードな毎日を送っておりますが、現場でハイレベルの選手に接し対応できることは、整形外科診療に大変役立っております。

2004年12月に高陽（口田南）にてスポーツクリニックを開業しておりますが、母校の選手をはじめ、

小学校のミニバスからプロ選手、高齢のスポーツ愛好家まで幅広い方々に御利用いただいております。これひとえに城北サッカー部OBの方々のご支援のたまものと深く感謝しております。

また皆様とサッカーという一つの共通語で語り合う日を楽しみにしております。



広島城北高校サッカー部会長

【OB会長 19回生 吉川 英司】

皆さま、こんにちは。今年の「初蹴り」で最上段のグラウンドで云々の方々は、半年ぶりですね。私事ですが、私自身も今年の4月1日より、仕事の関係で前任地の水戸（茨城県）から現在福岡市へ転勤となり慌ただしい日々を送っております。福岡付近のOBの方、是非一度、「城北中州OB会」を開催いたしましたしよ。

さておき、皆様もご承知の通り昨年度、我々の後輩達の活躍は近年

目を見張るものがありました。新人戦ベスト8を皮切りに高校総体ベスト16。高校選手権でも「二次リーグ進出！！ベスト16」というすばらしい結果を残してくれました。

昨年度の実績が「本物」か「幸運」だったのか？再確認できる場合は今年の結果だと思います。下部組織の指導者である大下先生率いる城北中学校と城北高校とが更に連携し指導方針等の役割分担を明確化し、東京の「暁星」などに負けない組織化、実績を積み重ねていってください。昨年も、試合の都度、宮本監督、岩井コーチ、猶崎コーチ、菊一コーチから結果報告をもたらしてましたが、「良い試合だったが…」 「あと1点が…」 「…しのぎきれなかった」という言葉をよく聞かされました。頭の良い皆さんなら、もう、わかると思います。「そのあと少しが普段の努力なのです。」社会人となり、15年経過しましたが、仕事上同じ思いをすることもしばしばです。そんな時

は、昔の「サッカー部」の仲間へ電話し憂さ晴らしに付き合ってください。皆さんも、同じ城北出身で「サッカー」を共にした同士、たまには正月の「最上段グラウンド」での「初蹴り」参加してみてください。現役の保護者の方々が毎年用意してくださる（毎年すいません。感謝してます。）うごん抜群ですよ。それに、意表をつく懐かしい顔と会えるかもしれませんよ。毎年参加してくれているOBの方々へ、「毎年一人が一人づつ同期のメンバーを増やすこと」の約束守ってください。来年度1月3日は楽しみにしています。

今年も、現役の皆さん頑張ってください。

「勝負は強いから勝つのではなく、勝つから強いのです。」





二〇〇四年 六月十五日 篠原孝弘

大変長々と書かせて頂きありがとうございます。このような機会を与えてくれた宮本先生感謝の意を込めて筆を置かせて頂きます。

“本当にありがとうございました”



ホームページを開設しました

<http://saijodan.picot.ne.jp>

是非ご覧ください



QPONのひとり言

我が広島城北高校サッカー部は、昨年の選手権2次リーグ、今年の県新人リーグと県のトップレベルで戦えるチームになってきました。

この現状に満足せず、原点に戻り

“誰からも応援してもらえる” チーム

“小さなドラマがたくさん生まれるハートのある” チーム

を目指してスタッフ・選手一丸となりがんばっていきたいと思います。

広島城北高校サッカー部 監督

宮本 誠 (19回生)

